

(様式 5)

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 富山県立福岡高等学校・教諭・堀井祐志
- 2 研修期間 令和5年8月29日(火)～令和5年9月6日(水) 9日間
- 3 調査研究課題
「アフターコロナ」の海外教育事情、および欧州3か国のSDGsに対する取り組みと「幸福度」における研究
- 4 研修機関等
オーストリア：市内視察
ドイツ：ミュンヘン市教育・スポーツ局、在ミュンヘン日本国総領事館、
オストヴェルテンベルク商工会議所アーレントレーニングセンター、Zeiss 本社
デンマーク：ホイデバンゲンス学校、ガメルヘレロップ高校、在デンマーク日本国大使館

5 研修の概要

9日間にわたる第10回海外教育事情視察に参加させて頂き、『新たな経験は心を豊かにし、人を成長させる』ということを実感した。私は英語科の教員として日々の授業や校務に従事しているが、自らの学びという観点では英語に関わるものが中心で、他分野や他業界のことに關しては恥ずかしながら不勉強であった。オーストリアでの美しい風景に心を奪われ、人生で初めて本場の芸術に触れる機会に恵まれた。ドイツでは歴史ある職業訓練の方策であるデュアルシステムについて学び、『理論と実践』の両輪を常に意識することで、日本の教育、日々の授業実践に活かすことができるのではないかとこの観点から視察を行った。デンマークでの学校視察では、授業参観に加え現地の先生方と意見交換をする機会もあり、日本の教育との違いを感じながら、新たな発見や学びがあった。

(1) ドイツにおけるデュアルシステム

ドイツで長きにわたり運用されている、「理論と実践」を体現する職業訓練のためのシステムである。日本でもいくつかの高等教育の現場でモデルケースはあるようだが、国に根付いた歴史あるシステムから学ぶことは大変興味深く、考えさせられた。英語科教員の立場から、日本での教育活動にどのように生かすことができるかという観点では、英文法などの理解や知識の習得が「理論」、それらの知識を駆使してアウトプットし、他者とのコミュニケーションを図る姿勢を養うことが「実践」である。「理論」に偏りがちな日々の授業運営に対し、いかに「実践」の場を提供するかを再考する貴重な契機となった。

(2) デンマークでの学校視察

デンマークでは日本の中学校と高校に相当する2校を訪れる機会に恵まれた。両校とも主体性を重んじる教育であり、教員と生徒、そして生徒同士が活発に意見を交換しながら展開されていく授業には目を見張るものがあった。調査研究課題の1つに「アフターコロナの海外教育事情」を掲げていたが、コロナ禍という言葉が完全に忘れ去られているように感じるほど、活気ある日常を取り戻していた。コロナ以前よりICTの活用は先進的であり、生徒への情報の提示や伝達はICTのメリットを最大限に生かし、視覚的な分かりやすさに加え、時間の節約にも寄与し、それにより対面による活発な議論の時間を十分に生み出していることにも気づかされた。日本ではコロナ禍でICTの導入が加速された側面があるが、ICTとコロナは本来切り離して考えるべきものであり、今後の授業での効果的な導入を検討する上で大変参考になった。また、ホイデバンゲンス学校では、多国籍の生徒が在籍するクラスの授業を見学し、デンマーク語だけでなく、流暢な英語でコミュニケーションをとる姿も見られた。その教室には、ロシアとウクライナ出身の生徒が同じ教室で共に学ぶ姿もあり、長期にわたる紛争がクローズアップされている中で、何の罪もない子供たちが互いに憎しみ合うことなく、平和に生活できる日々が早く来ることを切に願う瞬間であった。子供たちの学びと未来を保障するためには、分け隔てない学校教育が必要不可欠である。デンマークの幸福度ランキングは世界第2位であり、その一面を垣間見ることができた。続いて訪れたガメルヘレロップ高校では、化学の授業を見学した。コンフレークの塩分濃度を測定する実験で、教員の説明に対して積極的に質問



し、グループのメンバーとも終始意見を交わしながら取り組む姿勢には目を見張るものがあった。日本でも「アクティブ・ラーニング」という言葉が広く認知されるようになって久しいが、「教員対生徒」という図式ではなく、教員と生徒が同じ目線に立ち、活発にコミュニケーションを取りながら展開されていく授業の雰囲気を感じ、生徒主体の授業を目指す上で大いに参考になった。

(3) 各国のSDGsに対する取り組み

【環境に対する取り組み】

3国とも自転車専用道路の整備が徹底されていえることに加え、風力発電などのクリーンエネルギーの充実を垣間見ることができた。特に、デンマークのガメルヘレロップ高校では、各教科教育のカリキュラムにSDGsの観点盛り込まれており、教科を横断して、国を挙げて世界が直面する諸問題に対応する力を育もうとする気概が感じられた。日本でも長らくSDGsが推進されてきてはいるが、各国の取り組みを参考に、その土地や風土に適した施策を考案し、積極的に実行していく必要があることを実感した。例えば、富山県では日当たりの良さを持ち家率の高さを活かし、各家庭に太陽光発電パネルの設置を行政が積極的に支援することで、クリーンエネルギーへの転換が加速するのではないかと考える。

【Gender Equality (男女平等) における取り組み】

・女性の社会進出

女性が生涯にわたりキャリアを諦めることなく、多くの女性がワークライフバランスを大切にしながら働き続けていることに感銘を受けた。日本ではここ数年で男性の育児休暇などを推奨する動きが出始めているが、依然として「家事や育児は女性が中心に担うもの」という先入観を拭き去れていないように感じている。男女関係なく安心して働きに出ることができる背景には、国の手厚い社会保障が大いに関係している。少子高齢社会が加速の一途をたどる日本と対比し、大いに学ぶべき点があることを実感した。

・LGBTQへの理解と配慮

デンマーク王立図書館には、性別関係なく利用できる「男女共用トイレ」があり、性別を問わず、躊躇なく利用されている様子であった。その光景は特別なことではなく、何気ない日常として存在しており、もはや「LGBTQへの配慮」ということを意識していることが、見えない壁をつくってしまっているのではないかと感じた。カルチャーショックであると同時に、日本における男女平等のあるべき姿について、改めて考えさせられる契機となった。



(4) 幸福度について

現地の先生方や通訳ガイドの方々との意見交換の中で、「日本に比べて物事を選択肢が少なく、求める生活レベルも高すぎないことが、相対的に幸福度の高さにつながっているのではないか」というお話があり、膝を打つ思いであった。ハイレベルな科学技術に裏付けられた日本の豊かさや多様な選択肢が、反対に選択を迫られるプレッシャーとなっているという事実と直面し、そのパラドックスをいかに解決していくかが今後の課題であると考えている。

(5) 本視察を通して

現代社会では科学技術の発展により、ありとあらゆる物事をオンラインで済ませることができる。しかし、どれだけ便利になろうとも、心揺さぶられる風景や人との出会い、直接言葉や意見を交わすコミュニケーション、そしてそれらから生まれる感動は、実体験を通してのみ生まれるものであることを再確認し、「本物に触れること」の大切さを改めて実感することができた。ご同行させて頂いた富山経済同友会の皆様方には、視察の随所に渡り、様々な知見や物事に対する考え方についてお話しを伺うことができ、今後の私の教育観にも大きな影響を受けたと言っても過言ではない。本視察の経験を生かし、教員として成長できるよう、自らの世界を広げ、幅広い学びを実践し、感動し、その姿勢を生徒達に示していく決意である。最後に、多大なご支援を頂いた富山県教育委員会に、心より感謝申し上げます。